移行期における中国地域社会の文化と風俗に関する事例研究
――内陸農村の社会関係資本という視点から捉える――
（後　編）

張　　成

（紙幅の関係で，前編はすでに前号に掲載した）

３－１－２．大学生村官Ｌ　　民間文化の消失への嘆き

調査日　2013 年 12 月 4 日

村の脱穀場で大学生村官 L と偶然出会った。脱穀場は昔，村民が映画を見るところであった。それ以外に祭りの開催場としてもよく利用されていた。大学生村官は既に 2 年間滞在していた。彼に農村社会のことを聞いて見ることにした。

L：私は 2 年前に大学を卒業してからこの村にやってきた，大学では文化人類学を勉強していたため，農村社会の伝統文化に大変興味を持っていた。中国の伝統文化は急速に消えていると聞いていたが，まさかこんな速いとは思わなかった。今の農村社会は建築，芸術など目に見える有形文化だけではなく，各種の祭り，口述歴史などの無形文化も急激に消えている，この村も例外ではない。様々な風俗習慣，伝統文化が衰退してきた。昔の旧正月によく‘黄梅劇’などの地方劇を演じましたが，今は演じる人もあまりいなければ，観る人もほとんどいなくなっている。この村でも旧正月以外に人気（ひとけ）さえが感じられない。旧正月以外にはよろよろと歩く老人しか見えない。近年，出稼ぎの人が旧正月に帰っても自分の家に閉じこもり，テレビを見たり，ゲームをやったり，マージャンをしたりするだけで，近所にあまり関心を持たない。祭りを行うどころか，麻雀などの賭博と冠婚葬祭の宴席以外に人を集めることさえ難しい。生物学のたとえでいえば，村は健全な有機生命体ではなくなり，すでに年を取っていて，生命の活力を失いつつある。村の会議と選挙に参加する人が極めて少なく，自分と直接的な利害関係のない「公」のことに関心を持たない。最近麻雀などの賭博以外，広場ダンスが少し流行っているが，参加者はほとんど一部分の婦人のみに留まっている。火災防止・環境保護などは勿論，農業活動の灌

漑・水源管理さえ参加しない。

確かに聞き取り調査と実地調査では，昼間からマージャンを楽しんでいる人が多く見られ，路上に使い捨てられたオムツと宴会に使われたビニールシートをはじめ，生活ごみが散らかっていて，養豚場の糞尿垂れ流しなどが目立った。自分こそが村の主人公であるという自主意識が薄くて，自ら組織して周りの環境を整おうとせずに，心の底に誰かに頼って，管理してもらうという行政（誰か）への依存心理が非常に強いと見られる。金儲けなどの物質生活を求めるには熱心だが，周りの公共事業，公共文化に関心を示さない。

このような現象について，トクヴィルは「物質主義が世間に根を張り，人の魂を腐敗させはしないとしてもこれを柔弱にし，やがては一切の精神のばねを音もなく弛緩させるであろう[1]」と過度な物質生活への依存は社会の公共文化を腐食すると予言した。また，オルダス・ハクスリー[2]は『すばらしい新世界』で機械文明の発達による繁栄を享受する人間が，自らの尊厳を見失い，労う型のコントロール（control by reward）になってしまったと悲観的なトーンで人間の自ら隷属になることを描いた。彼によると，このような社会では，人々は思考などが要らず，ただ絢爛で友情が溢れている世界を享受するだけで良い。このような快楽感が広がれば広がるほど社会が安定する一方，徐々に活力を失い，ゾンビ社会になってしまう。ゾンビ社会の最も大きな特徴は思考力の喪失である。人間は考える力がなくなれば，心理的な示唆とプロパガンダを受けやすくなり，現状に満足してしまいがちである。そうなると，社会を変える意欲がなくなり，それに伴って行動能力も減退または喪失してしまうだろう。中国の地域社会はまさにハクスリーのあらわしているゾンビ社会になりつつあると言えよう。

このようなゾンビ社会ではまた他の特徴が見られる。それはこのような社会では人々の間につながりが希薄化していることである。伝統的な地域社会，いわゆるムラ社会では，生活のすべては共同体に依存しているが故に，人々のつながりは非常に密接であった。しかしながら，すでに見てきた通り，近年中国の地域社会では事態は一変したのである。その原因は以下の三つがよく挙げられている。一つ目は，産業構造と就業構造の変化に伴って，若年雇用者層が都市部に大量流入し，さらに一人っ子政策で，少子高齢化や単身世帯の増加，地域活動を担う若者や現役世帯層の減少傾向が続いている。二つ目は，交通通信

機関の発達などによる生活圏の拡大，テレビやスマートフォン，パソコン，車などの普及によって人々のネットワークが広がった結果，地域共同体への依存度が軽減した。三番目は，生活様式および生活意識の都市化，特に近年では，若者の間では情報化の進展による関係性の変化などによって，地理的なコミュニティよりもウェブ上のコミュニティに関心を示す人々が増えていることも大きな要因の一つである。

以上よく指摘されている原因以外に，筆者が全体主義を経験した中国は，特に 1949 年から 1979 年までのおよそ 30 年間社会主義という名目の下，国家が‘社会’を飲み込んでしまったことが最も大きな原因ではないかと思う。新中国成立した後，最初の三十年間は社会主義の国と標榜しながら，‘社会’を容認するどころか，‘社会’の存在を恐れ，むしろ極力反‘社会’であった。20 世紀 80 年代の改革開放に伴って，様々な面においての政策が緩和され，社会を縛る縄も緩くなった。だが，民主と憲政が実現されていない中国では，ポスト全体主義の反‘社会’の政治体制以外に，人々はまた消費主義に陥ってしまい，‘社会’は享楽主義にも排除されるようになった。筆者は消費主義を非難するのは，人々を享楽の追求に誘う点ではない。享楽の追及に人を完全に没頭させてしまうことなのである。結果として，‘社会’という組織は現在の中国ではポスト全体主義と享楽主義の板挟みにある。

３－２．教育からみるＢ村の社会関係資本

調査日　2015 年 8 月 11 日

前述した通り，教育と社会関係資本は互いに影響しあっている。つまり，社会関係資本が教育に影響を与えると同時に，教育が社会関係資本を育むこともある。2015 年 8 月に一週間程度 B 村で調査を行った。B 村は A 村と似ている問題もあるが，それと別に小学校が廃校になったことは少し異例だと考え，さらに初級教育は地域社会の教育事業の中心的存在で，かつのちのちにも精神的な拠り所でもあるから，B 村での調査は重点的に小学校教育に関する聞き取り調査を行った。以下は調査日記に基づいて整理した内容である。

廃校の光景　B 村の小学校は様々な事情で 2008 年に閉校された。学校の鉄門が錆びていて，鎖は付けられていなかった。入ってみたところ，キャンパスの空き地に野菜が植えられていて，教室のドアが木製のためすでに腐食してい

た。壊れた窓を通して教室内の光景を覗いて見た。廃棄された家具，ベッド，椅子，ソファなどがあちこち転がっていて，数年前に使われたノートと黄ばんでいた国語教科書が散在し，黒板にまだ小学生の絵と落書きが残っていた。裏門をでたところに辛うじて生き残った売店[3]があった，店主D2に学校についての話を聞いた。彼は元々この小学校の教師（民弁教師[4]）を勤めていた。以下はD2と会話記録である。

この小学校は1963年に成立したのだ。最初は校舎がなくて，民家の建物を借りて2年間程間に合わせた。三年目になってようやく日干し煉瓦で簡易教室を作り上げた。文革の時，校舎前は地主と富農などの「黒五類」[5]を批判闘争する場所であった。当時集会時にリーダーのスピーチと最高指示が全て校舎前で出された。1986年国から補助を少し受け，村も一部資金を捻出し，また村民は力を合わせて小学校を建て直した。当時皆積極的に協力し，現在よく見られるフリーライダー（ただ乗り，非協力者）はほとんどいなかった。学童の入学率も非常に高くて，教員の質も比較的によかった。80年代の末期から90年代の中頃までの数年間はうちの小学校の最も輝かしい時期だった。進学率も学生の成績も全県ではトップクラスに入っていた。当時卒業生の中に何人かは大学まで行っていたという。1996年僕は正式な教員になれたはずだが，一人っ子政策に違反したため資格が取り消された。それが契機で教師の仕事をやめ，売店を経営し始めた。1998年から徐々に変化が現れた。少しでも能力とコネのある教師はほとんど鎮の中心学校または市内の学校に転職した。そのため小学校の教育質が急速に落ちた。村民たちは失望感を感じ，経済的に余裕のある家庭は子供を市内の学校に行かせるようになった。余裕のない家庭の子供は学校をやめて，親と一緒に出稼ぎ先に行っている。

数年前に何人かの村民が共同出資で学校を建て直そうと呼びかけたが，村の青壮年層が皆出稼ぎに行っているので，家に残っている‘386199部隊’[6]は公共事業に関心を示さず積極的に参加しようとしていない。特に教育適齢期の子供のいない家庭は自分と関係ないと思い，無駄なところで損したくないのでお金を出さない。まあ，正直に言うと，たとえ集金の問題が解決できても，こんな辺鄙なところで仕事に甘んじる先生はとうてい見つからないだろう。学校が閉鎖に追い込まれた原因はいろいろあるが，一人っ子政策と「基礎教育改革と発展に関する決定」[7]が最も大きな影響を与えたと思う。

後の聞き取り調査でもD2の話が裏付けられた。確かにここ数年村民たちの子供の教育に対する考え方がかなりに変わってきた。ある村民曰く，

「たとえ学校に行ってもあまり望みがない。また仮に幸運に恵まれて大学に入ってたとしてもお金がかかるばかりで，昔のように卒業後仕事は配分してくれず，安定している生活が保証されない。この村では数年前に某大学の政治教育を卒業した大学生がいた，彼が大学で何を勉強したのかわからないが，結局大学を出て公務員などになれず，我々と同じように出稼ぎに行っている。計算してみれば，高校3年と大学4年合わせて7年間に少なくとも6万元以上掛かる。一方，逆に学校を出て早く出稼ぎに行けば7年間10万元以上稼げる。この差は誰にとっても火を見るよりも明らかであろう。

このように，村人の間では経済面の計算が最優先される傾向にある。彼らにとって教育の使命は人間を蒙昧から免れさせるのではなく，ただ金稼ぎの手段だと思われている。そのため，成績がよくて勉強意欲と学力もある子供はいわゆる出世の可能性が高いので，親が借金しても大学まで行かせるケースもある。しかし，多くの場合は親が出稼ぎに出ていて，祖父母に育てられた子供はなかなか勉強に集中せず，ゲームとかテレビなどに凝っていたり，麻雀などの賭博を楽しんでいる大人の周りで遊んでいたりするのである。中学校にでも入れば，学校が遠くなり，祖父母は農作業があるから毎日送迎するわけにはいかない。また，祖父母とのジェネレーションギャップが大きすぎると，孫を可愛がる傾向があるから，我がままで，自分勝手な甘えん坊になってしまう子供が多い。子供たちはよくお祖母さんに小遣いをゆすり，学校をサボってネットカフェーに浸かっている。祖父母がいくら怒っても空耳で，逆切れの場合も少なくない。一方，祖父母に頼らずに寄宿学校に任せるのはどうだろうか。聞き取り調査によると，完全寄宿学校は高くて，教育の質も今ひとつである。呆れたことに，子供の成績は適当に作られているものであり，試験前に試験問題を黒板に書いてあらかじめ明らかにしていても試験時に解けないなどのケースもよく見られる。

D2が心配しているのは小学校自の閉校自体だけではなく，村人の教育への軽視，知識文化への尊重が風化することである。言い換えれば，村人には精神文化面の向上心が堕落していることが最も懸念されていることである。学校の閉校は様々な現実の理由例えば人口の減少，費用の増大，教育への失望などが

挙げられるが，一つの村における教育文化への関心という視点からみれば，これはただ一つの小学校が生き残るかどうかの問題ではない。地域社会にとって，小学校の閉校は教育の衰退のみならず，精神的な絆を培う文化の衰退に種をまいたとも言えるだろう。教育に対して失望し，人心が陶冶されず，文化虚無感という雰囲気がはびこるになると思われる。

内陸農村の村民のエートスについて深く研究した田原[8]は「中国経済発展の牽引力となってきた中国農民の行動原理やその背景の考え方は‘発家致富’の四文字に集約される。‘発家致富’は‘家を興し富裕に至らしめる’即ち小農民の家庭や一族が世代を超えて栄え富むことにほかならない。きわめてシンプルな目標である」と指摘している。B村での調査によると，村民間では誰が成功しているかを判断する基準はどれほどお金を持っているかである。旧正月に里帰りの村民同士は平気で今年いくら稼いだかと相手にはっきりと聞いている。誰が良い車を購入したか，都市で家（マンション）を購入したかなどはすぐ比較の絶好材料になる。少し前までは大学に受かったことはトップニュースになり，皆に慕われる対象になるのだが，昨今のところは大学に合格したか否かはともかく，「搞到钱没有」（お金は稼いだか）は成功の唯一の判断基準になっている。出稼ぎ経済[9]のもとに農民が目先の利益や金銭ばかりを追い求め，教育などは二の次である。インタビューを受けた一人が，小学校さえ卒業しておらず，ここ数年建築業で大変成功している。彼が「教育を受けなくても儲けに影響が出ない。現に俺の建築隊（自分の会社を指す）で仕事する大学生はいっぱいいるよ。大学を出ても得なことはあんまり感じない」と自慢げに話した。

中国の地域問題研究者于建嵘の百村調査でも「読書無用論」（勉強しても役に立たない）との論調が流行っているようである。大学に行っても，卒業イコール失業で，家庭の期待していたリターン（良き仕事，良き稼ぎ）が見られない。農村出身者は勉強を通じて自分の運命を変えることができない以上，大金と時間をかけて勉強する甲斐が全くない。それよりも早く学校を出て出稼ぎに行った方が採算に合うと思っているという。本来なら，教育はただ専門家と職人を目指すのではなく，独立した人格と自由な精神の持ち主を養成するものである。一人の人間として自分で物事を考える能力，社会を認識する力，市民精神などを培うものである。さらに政治面から言えば，権力乱用への抑止装置は，公教育である。トクヴィルが参照しているケネーの言葉によれば，「専制は，国民

が啓蒙されれば不可能となる」からである。ケネーのある弟子は，「権力乱用の弊害を蒙った人々は，何の役にも立たない対策を次々に考え出した。ところが，真に有効な唯一の対策，すなわち，本質的な正義と自然的秩序を全国民に継続的に教える公教育，というものに思い及ばなかった」と述べている[10]。一国の青年にさずけられる教育をみれば，その国の運命を幾分でも予想することができるであろう。したがって，現在中国の教育方針では，最も暗澹とした将来が予想されるであろう。というのは，人々の精神が，改善されるのも，悪化するのも，幾分は教育と訓練によるのである。

以上見てきた通り，「一切向前（钱）看」（お金がすべての判断基準）という社会風潮の中で，中国の地域社会では人々の教育と文化に対する認識は極めて近視眼的と言わざるをえない。物質的な豊かさはある程度満たされたが，これからは徐々に「モノの豊かさから心の豊かさへ」と方向転換すべきと思われる。だが，惜しむらくはこのような雰囲気が少しも見えない。

３－３．文化行事からみるＣ村の社会関係資本

３－３－１．文化行事に関する事例の紹介

調査地Ｃ村では，様々な伝統行事[11]があったが，紙幅の関係で本稿では聞き取り調査に基づいて，いくつかの文化行事に関する事例のみを整理しておく。

事例１　調査地では，毎年，旧暦７月15日の‘鬼節’[12]に様々なイベントが盛んに行われてきた。この日が来る前に「火紙」（黄色い紙）を用意し，木製の閻魔金印（梵語が刻まれている）を「火紙」に押してあの世で使う紙幣（冥幣とも言う）を刷っておく。さらに，白紙で冥幣を包み，上に自分の先祖と何代目と名前などを書く。裏に「中元大会　不孝子孫献上御笑納」と記す。冥幣を届けてくれる飛脚の役割を果たすのが道祖神である。‘鬼節’当日のたそがれに，村の一角で，冥幣及び酒などを供え，先祖に届ける。子孫繁栄と先祖の加護が代々続くことを祈願する。この日，家族全員が集まり，一緒に食事しながら先祖を偲ぶ。毛沢東時代から，「破四旧」[13] というスローガンの下，このような仕来りは迷信だとレッテルが貼られた。近年になって，若い世代がほとんど出稼ぎに行っていることとあいまって，このような祖先を偲ぶ行事は徐々に行わなくなった。インタビューに対して，村民Ｅさんは冗談半分で「一家を養うため出稼ぎに行っている。生きている人さえ金に困っているのに，亡くなっ

た先祖のことを考える余裕がない。確かに最初は少し後ろめたい気持ちはあったが，政府の宣伝している通りあの世なんてないから，やらなくても大丈夫だろう」と話した。

事例2　C村は「張」という苗字の村で，毎年，旧暦の十月に，自分の先祖を祭る大きなイベントがある。このイベントは自然村の単位ではなく，同じ族譜[14]に所属する武穴市の外の「張」という苗字の村も参加する。この祭祀活動は，「張」の苗字を有する男性が中心的になって行われている。当日生きている羊，豚，鶏などを生贄として祖先を祭る。各族長が代表して挨拶し，内容は大体本族の歴史と伝統を紹介し，更に族規等の倫理道徳を強調し，勤勉などの美徳を賞賛した後，各分野で活躍している模範者を表彰する。また，教育面では，昔功名を得た人を模範として，子供の教育を重視するようになった。近代では，大学に合格した人を奨励することで，教育の大切さを次世代に伝えている。さらにその年に男の子が合わせて何人生まれたか，家族が何人増えたかを先祖に報告し（女の子が含まれない），最後に新生男児全員に祝物を贈呈する。この祭りは封建時代の思想が色濃く残っていて，時代に遅れている部分もあるが，祭りを通じてチームワークを作ることは農耕社会では非常に重要なことであった。水利施設の維持，田植えや稲刈りなど大量の労力を必要とする作業，また屋根の葺き替えや冠婚葬祭などの面の相互扶助，更にそれに伴って農村社会の基本的な秩序と倫理規範の維持には，祭りから発生した社会関係資本が大きな役割を果たしていたのも否めない事実と思われる。今後の中国の内陸地域社会でも，公共事業，冠婚葬祭，祭り，農業などのための共同作業が必要になるので，伝統的な「社会」のネガティブ的な面を取り除き，ポジティブな面を取り入れ，総合的に評価し，社会関係資本の豊かな近代的な市民社会に円滑に移行してくためのプロセスを展望していく必要があると思われる。

事例3　C村における端午節[15]の伝統行事について，従来楚の国であるこの地方では粽と赤いマークのつけられた卵を食べる習慣がある。また，菖蒲を家に飾るなどの習慣以外，屈原を記念するため，‘賽竜舟’（竜船の競争／ペーロン競争）というイベントも行われていた。C村の周りには，大きな湖以外に無数のクリーク（小運河）がある，‘賽竜舟’に絶好な自然環境を提供していた。1988年までにこの村では，自然村ごとにグループを作り，端午節の日に村民間で‘賽竜舟’を競っていた。しかし，1989年の‘竜船事件’[16]以来，政府が

‘賽竜舟’に関する行事を全て禁じた。本来ならば政府が事件の真相を究明し，責任の所在をわきまえ，対策を立てて事件の再発防止を努めるべきだが，短絡的に禁ずる手段を取った。これにより，伝統文化の喪失，コミュニティ醸成の場の欠如がもたらされた。

事例 4　旧正月（春節）に地域の組織のもとに，村ごとに「菩薩迎え」[17] という習慣があった。五穀豊穣と無病息災などの願いが込められている。仏像を各村に二日間置き，村民が参りに来る。夜は村の周辺にある邪気と厄害を駆除するため，暗闇の中仏像を担いで村の巷を通ったりする（現地では‘参神’[18]と言う）。‘参神’が終わった後，仏像の前で会議したり，村の大きな行事を決めたりする。決めたことを神前契約になるから皆必ず守ることにしていた。この行事は文化大革命が終わったまもなく 1980 年に復活したが，迷信色彩が濃いと兎角非難され，若者もこのような行事よりマージャン・賭博を好む，したがって，イベントに参加する人を組織するのは大変難しくなっている。同じく旧正月に「竜舞」「獅子舞」[19] がある。広済県誌（1994）によると「竜舞は昔から人々がめでたい日（春節）に竜に祈願し，五穀豊穣、無病息災を祈願する伝統行事である。主な道具は布，竹，草で作った‘竜’である。竜の長さは‘節’で数える。よく見られるのは九節竜，十一節竜，十三節竜で，奇数の方が吉とされている。また，竜の体内に蝋燭，提灯などが入れられた‘火竜’もある。夜間に鑑賞するのは大変壮観で，芸術性も非常に高いと言われている。1990 年ごろまで，竜舞も獅子舞も時代の発展とともに，人々の体を鍛える運動にもなり，動作は非常に変化に富み，形式を重んじるようになった。竜舞，獅子舞と同時に，武術，音楽，劇なども上演するので，貴重な総合的民間芸術である」と記述してある。調査地の C 村は，1989 年の旧正月に村を挙げて竜舞を行い，セットとして現れる獅子舞とも取り入れられたため，至るところで好評を得ていた。だが，出稼ぎ経済の波の中では，これらの伝統行事が経済利益をもたらすことはなく，お金のかかることでもあり，「發財」にしか興味ない村民の価値観との食い違いで，惜しむらくは竜舞と獅子舞はこの地域では見られなくなってしまった。

3－3－2．事例分析

伝統文化の行事は社会的に見れば，共同体全体によって行われ，共同体統合の儀礼として機能しているが，調査地では複雑な様相を呈している。

事例1から移行期における中国地域社会の人々の生命観と価値観が変遷しているのが見られる。儒家の代表者孟子の言葉「不孝有三，無後為大」[20] は今でも中国人の根本的なエートスを支えている。数千年以来，中国人は後継ぎを生むことが人生の中で最も大きな責務と思っている。有限な生命は子孫がいることのよって無限となる。そのため，現世はいくら困難があっても後継ぎの子孫がいれば希望もあり，やり直すことも可能だと考えている。賀[21]は限りのある命に無限な意義が潜んでいる価値観を本体性価値と定義づけ，「伝統社会の中，中国農民の本体性価値は生命を継続させることにある，農民たちの最も心配事は後継ぎのことである。後継ぎの問題がなければ富を求める，名誉を追求する欲求が更に湧いてくる。逆に言えば，子孫がいなければ，人生に希望と期待がなくなり，現世享楽を重んじるようになる」と指摘した。事例に出ている村民は先祖と来世に対して虚無感を示し，現世こそ最も重要視していると考えられる。いわゆる科学から見れば，合理的に見えるかもしれないが，しかし果たして科学は人間の信仰問題と本体性価値まで解決できるだろうか。本体性価値の揺れによって，人々は物事を考える時に長い目で見るのではなく，近視眼的に，また刹那的の現世のこと，目先の利益だけに囚われてしまう。

事例2から中国の地域社会において社会性価値[22]が失いつつあることが分かる。社会性価値とは，人間は他人が自分をどう思っているかのことである。これは人と人が付き合っているうちに生じたものである。社会性価値があるこそ，共同体では輿論と中国ではいわゆる「面子」が道徳の尺度になれる。さらに言えば善と悪は公平に評価できる。共同して先祖を祭るなどの文化行事は村民が社会性価値を再認識する場でもある。

事例3と事例4から，全体主義[23]の政治体制の中で政府の文化行事に対する態度と扱い方は文化行事の存亡に関わっていることが分析できる。移行期の中国地域社会では，宗教に関わるものは，迷信だと決め付けられがちである。菩薩，神様などを信じる人は時代遅れの愚かな人で，現代社会主流の価値観に合わない人間であると思われている。一方，消費主義が主流となっている価値観の意味での成功（発家致富）を実現することが難しい。つまり中国全体における主流価値観と地域社会の「發財」が困難である現実と掛け離れている。地域社会の人々は伝統的な価値観が壊され，さらには毛沢東時代にマルクスレーニン主義の下，共産主義を実現するというユートピアも破綻した。今日に至って，

移行期に生きる人々は新しい価値観が構築されておらず，精神世界は虚無になっていて，まさに岐路に彷徨っている状態である。こうしたのなかで，政府側は短絡的な政策を打ち出してしまい，一層事態の深刻化に拍車をかけた。

4　全体考察

本稿では，中国の産業発展や都市化に伴って，農業生産を基盤とする伝統的な地域社会の共同体機能の衰退と社会関係資本に関する調査を踏まえつつ考察してきた。

A村のごみ処理問題，灌漑用水利施設の問題などでも考察してきたように，互酬性の規範が形成されていないことが分かった。社会関係資本の厚いところでは，他者のために行動するとその相手から返礼が得られなくても，いつかは他の人から自分も利益になることをしてもらうことができる。菅谷[24]は，規範に従っているコミュニティでは，あわよくば他人を利用して利益を得ようとする機会主義を抑制し集合的問題の解決を効果的に行うことができる。つまり，一般化された互酬性の規範は自己利益と連帯を同時に実現させるものである。そして，これが他者一般に対する信頼を強化する，と指摘している。社会関係資本とは関係のネットワークから生じる現実あるいは潜在的な資源の合計であり，社会的交換の場である。Blau[25]は交換のダイナミクスを考察し，個人は他人のために自発的に便宜を提供し，便宜を提供することで，相手の報いようとする見返りの義務を相手に負わせると分析している。経済的交換と異なり，社会的交換は交換価値が特定できないが，自分が他者から利得を得るためには，自分は他者に満足を与えねばならず，コストを支払わなければならない。A村の事例では，このような社会交換原則を遵守するのではなく，協力せずに利益だけを享受する薩摩の守（ただ乗り）が現れると，積極的に公共事業を推し進め，社会関係資本を築くのが馬鹿らしいと感じてしまうため，社会関係資本は衰退することになる。

B村の小学校の現状から見れば，内陸農村では近代化しつつある潮流の中で，都市部のように教育が十分保障されていない。教育と社会関係資本の関係について，稲葉[26]は，「社会関係資本が教育に影響を与えるというコールマンの主張は，その後多くの実証研究によって追認されている。イギリスでも地域別社会

関係資本インデックスは，十六歳での教育成果と密接に結びついている。さらに範囲を広げて，イギリス政府の内閣府にいたデビット・ハルパーンは国別の教育成果も社会関係資本と相関があるという。社会全般に対する信頼度が高い国ほど，識字率がたかい。もっとも，識字率が高いからよりスムーズな意思疎通やネットワークの形成が容易になり，社会関係資本が高いとも考えられるので，両者の因果関係は定かではないが，両者に何らかの関係があることは間違いないだろう」と述べている。調査地でのインタビュー・村民との対話内容を分析した結果，内陸農村の社会では社会関係資本と教育がお互いに因果関係になっていることが分かった。現在問題になっているのは，社会関係資本がすでに壊され，非常に貧弱になっているところでは何を呼び水として再建できるのかである。

C村のケースから中国の内陸農村の地域共同体の機能が衰退していることが見える。従来，土地集約型農業生産が共同作業を必要とした背景に，結束力が非常に重要視されていた。祖先崇拝が色濃く残っている地元の祭りと様々な文化行事が一体感や帰属意識醸成の上で重要な役割を果たしてきた。産業構造の変化や人口の都市集中に伴ってこうした要素の重要性が低下していることは確かに避けられないかもしれないが，中国の内陸農村では，伝統的な地域社会が果たしてきた機能と，近代的なソーシャル・キャピタル，とは非連続的なものとして受け止められ，前者の衰退を後者でいかに補っていくべきかという連続的な視点が希薄なように思われる。すなわち，本来であれば，伝統的な共同体が果たしてきた機能は政府による社会保障制度などの整備や市場による保険商品の普及によって徐々に代行されていくべきであるが，そのシフトは様々な原因で必ずしも円滑に進んではいない。

以上三つの村ではいわゆる新中国が成立して以来，特に文化大革命までの間に，政治目的のプロパガンダのため，古い伝統的な祭りと文化行事は悪と位置づけられてきた。特に文化大革命時代に「破四旧」というスローガンのもと，旧習慣旧文化は民衆を苦しめてきたものであり，封建的かつ迷信的な要素も多いとされていた。近年では祖廟を再建するなどの復活も見られるが，社会関係資本の薄いところでは人を集めることさえ難しい。権力闘争を繰り返す動乱の歴史が続いてきたため，人を簡単に信じるどころか，最初から人を疑うのがいつの間にか習慣になってしまった。社会関係資本における最も大切な信頼が一

旦失われると，協力せずにただ乗りの方が得だという認識が確立し，人々の間お互いに不信感と非協力的な態度が増幅されていくという悪循環が生じてしまい，壊されたネットワークと信頼を再構築するのは至難の業であろう。

文化と社会関係資本の衰退原因は，市場と政府の失敗を補完するための第三の要因である「社会」が長期にわたって欠如しているにあると思われる。中国では市民社会的なソーシャル・キャピタルの重要性がまだ認識されていない。一部の学者，例えば許（2010）によると「現代中国の実態は市民はいるにはいるが，市民社会はまだ成り立っていない」という議論もあるが，まだ社会全体の共通認識になっていない。許[27]は「社会が現代化する過程に日本，韓国，台湾，香港などでは‘社会’が解体されずに済んだお陰で，地域文化が生き残った」と指摘し，「文化は‘魂’であり，‘魂’は‘体’に依存しなければならない。‘体’となるものは国家ではなく，社会であるべきだ。」と指摘している。「社会」が負うべき任務を政府にまかせしまうと，社会関係資本が栄養不足で健康に成長できず，存続の土壌がますます痩せていくだろう。また，中国特有の政治体制における経済構造から見れば，土地をはじめ私有財産権が完全に守られていない中では，人々は自分の権利と責務の区別が付かず，公私にわたる利益を守るため，ただ一方的に権利を主張し，責任と義務を果たそうとしていない。

さらに，法治社会（rule of law)が実現されていない中国では，規則を守るというルール法律意識はまだ根付いていない。問題解決の鍵となるはコネの広さとカネの多寡で，場合によって「混混」（チンピラ）の暴力で解決する，まさにジャングル世界[28]になってしまうのである。これについて，阿古[29]は「法の支配が定着せず，思想・言論が厳しく統制される社会では，社会のモラルが低下し，正直者が馬鹿を見る風潮が広がっていく。そのような環境において，新たなアイディアや社会的に意義のある価値を創出するのは難しい。国の難局を前に，社会責任を果たそうという国民が育たず，市民社会も発展しない」と指摘している。厳密な証明はまだこれから為されねばならないが，あえて結論を述べるなら中華民国までの礼治社会の崩壊，現在の法治社会の不完全が中国の地域社会における社会関係資本の貧弱と混乱状態の大きな原因だと考えられる。

おわりに

本稿では，移行期における中国の内陸の村を中心に質的に調査した。調査資料に基づき，地域社会における人々の価値観，文化に対する意識と見方がどう変化してきたのか，政治のイデオロギー，経済の発展状況，法治の度合いなどの影響を受ける社会関係資本とどう関わっているかについてまとめて分析してみた。民主と法治は健康的な文化活動と娯楽活動及び良好習俗の主要な条件であり，社会関係資本の形成における最も重要な基本的要素であることを導き出した。

中国の内陸農村における社会問題を解決するには，公の力である政府に頼り過ぎるのではなく，民間の力を発揮しなければならない。フィールドワークでの調査でも分かるように，一般民衆や政府の役人から一部の研究者までの間に，政府の管理監督が不十分であるという認識が多く存在している。筆者は今日の現状を来たしたのは，まさに一党支配体制の下，政府の管理が社会の隅々まで介入したことに起因しているのではないかと思う。自分さえ身近なことに関心を示さずに，他人または政府に任せることはいかがなものかと思わなくてはならない。移行期にある激しく断裂した中国社会において問題となっているのは，信用を築くことができず，相互不信が高まり，社会関係資本が非常に薄い現状である。今後，民主と憲政が中国で実現したら，民主制度と立憲制度が機能し，民間の組織が雨後の筍のように生えるのではないかとやや楽観的に考えている，少なくともそういう可能性を提供してくれるに違いない。そうなると，民衆の自治力が徐々に育てられ，ソーシャル・キャピタルもいずれ育まれ，断裂した社会も少しは修復できるのではないかと思われる。

資料・参考文献

中国語文献

陳柏峰（2011）『郷村江湖：両湖平原“混混”研究』中国政法大学出版社

董磊明（2005）『大力発展繁栄農村文化』人民日報 2005 年 12 月 12 日　第二版

費孝通（2012）『皇権与紳権』岳麓書社

郭于華（2000）『儀式与社会変遷』中国社会科学文献出版社

賀雪峰（2009）『村治的逻辑―農民行動単位的視覚』中国社会科学出版社

賀雪峰（2008）「農民価値観の変遷及対村治理的影響」『郷村文化与新農村建設』社会科学文献出版社
賀雪峰（2013）『新郷土中国』北京大学出版社
李小雲，趙旭東，葉敬忠（2008）『郷土文化与新農村建設』社会科学文献出版社
梁鴻（2015）『中国在梁庄』　中信出版社
陸学芸（2002）『当代中国社会階層研究報告』社会科学文献出版社
陸治業（2011）『城鎮化過程中農村賭博犯罪高発的調査報告』　法制与社会
孫　浩（2012）『農村公共文化服務有効供給研究』中国社会科学出版社
呉理財（2011）『当代中国農民文化生活調査』知識産権出版社
徐　平（2008）「社会主義新農村建設と文化建設」『郷村文化与新農村建設』社会科学文献出版社
許紀霖（2010）『読書人站起来』中国人民大学出版社
許紀霖（2014）『中国何以文明』中信出版社
于建嵘（2011）『底層立場』上海三聯書店
周維紅（2008）『農村工業化論』中国社会科学出版社
周大鳴（2006）『農村労務輸出与打工経済：以江西省為例』中南民族大学学報（人文社会科学出版）第 26 巻 1 期
資料：『W 県誌』（1994）湖北省 W 市地方誌編集委員会　漢語大詞典出版社

日本語文献
阿古智子（2009）『貧者を喰らう国』新潮社
今堀誠二（1973）『中国の民衆と権力』頸草書房
石黒広昭・亀田達也（2010）『文化と実践－心の本質的な社会性を問う』新曜社
稲葉陽二（2011）『ソーシャル・キャピタル入門』中公新書
大澤真幸（2010）『社会学辞典』弘文堂
佐藤仁文（2008）『中国農村の信仰と生活』汲古書院
園田茂人（2004）『変貌する中国の家族』監訳　岩波書店
園田茂人（2001）『中国人の心理と行動』ＮＨＫブックス
田原史起（1998）『現代中国における権力と支配』アジア政経学会
デュルケーム（1985）『自殺論』宮島喬訳　中公文庫

富永健一（1987）『社会構造と社会変動――近代化の理論』放送大学教育振興会
トクヴィル　（2005a）『アメリカのデモクラシー』第一巻（上）　松本礼二訳　岩波書店
トクヴィル　（2005b）『アメリカのデモクラシー』第一巻（下）　松本礼二訳　岩波書店
トクヴィル　（2005c）『アメリカのデモクラシー』第二巻（上）　松本礼二訳　岩波書店
トクヴィル　（2005d）『アメリカのデモクラシー』第二巻（下）　松本礼二訳　岩波書店
トクヴィル（1998）　『旧体制と大革命』小山勉訳　ちくま学芸文庫
野沢慎司（2009）『リーディングス　ネットワーク論』頸草書房
ハイエク（1992）『隷従への道―全体主義と自由』一谷藤一郎訳　東京創元社
ハックスリー(1932)『すばらしい新世界』高畠文夫訳 角川書店（角川文庫）1971 年
福武　直（1976）『福武直著作集　第 9 巻　中国農村社会の構造』東京大学出版会
濱嶋　朗（2005）『社会学小辞典』有斐閣
見田宗介（1996）『現代社会の理論――情報化・消費化社会の現在と未来――』岩波新書
見田宗介（2006）『社会学入門――人間と社会の未来』岩波書店
安丸良夫（1999）『日本の近代化と民衆思想』平凡社
安丸良夫（2007）『文明化の経験――近代転換期の日本』岩波書店
ロバート・D・パットナム（2006）『孤独なボウリング』柴内康文訳　柏書房
若林敬子（1996）『現代中国の人口問題と社会変動』　新曜社

英文文献

Blau P.M. Exchange and power in social life, New York : Wiley, 1964.
Bourdieu, P. 'The forms of capital' (R.Nice Trans.), In J.G.Richardson (Ed.), Handbook of the theory and research for the sociology of education (New York: Greenwood press, 1996) pp.95-120.
Coleman,J.S. 'Social capital in the creation of human capital,' American Journal of

Sociology, 94, Supplement (1988), pp95-120
Putanam R.D.Making Democracy Work : Civic Tradition in Modern Italy (Princeton, NJ: Princeton University Press, 1993)

論文
阿古智子（2009）「水利・土地利用から見た湖北省農村の社会関係資本」『近きにありて』汲古書院　第55号　pp.113-120
阿古智子（2016）「現代中国における「公民運動」のポテンシャル」国際問題 2016年3月　No.649　pp.36-48
呉志強（2008）「中国における新規大卒者の職業達成に関する地域要因の実証研究」神戸大学大学院人間発達環境学研究科研究紀要第1巻　第2号
王李娜（2008）『社会学視野的農村賭博問題研究──以皖広徳県為例」南京師範大学（修士論文）
田原史起（2009）「道作りと社会関係資本──中国中部内陸農村の公共建設」『近きにありて』汲古書院　第55号 pp.121-131
大守隆（2011）「アジアのソーシャル・キャピタルとその地域統合への含意」『社会関係資本研究論集』第2号 pp.13-25

華中師範大学外国語学院日本語科講師
一橋大学言語社会研究科博士後期課程

---

(1)　トクヴィル（2005b）p.228
(2)　ハクスリー（1932）
(3)　商品の種類が少なくて，在庫も少ない。3台の麻雀オートマシンが置かれていて，売店というよりむしろ麻雀館と言うべき。
(4)　公務員の身分を持たない小中学校の教員（給料は国の補助金以外は民間例えば村自治体で負担する）限定された期間に行われる試験に合格すれば，正式な教員になれる制度もあった。
(5)　中国において文化大革命初期に，出身論に依拠し，労働者階級の敵として分類された5種類の階層のこと。具体的には地主，富農，反革命分子，破壊分子，右派及びその家族も含める。
(6)　386199部隊とは婦人，子供，年寄りの総称を意味する。中国では3月8日は婦人の日，6月1日は子供の日，9月9日は老人の日と定めされているので，それに因んで386199という名前が使われている。

⑺　閉校の直接的な原因は2001年中国国家国務院が「基礎教育改革と発展に関する決定」の頒布だと思われる。「決定」によると，中国農村における学生数に合わせて学校の分布を大調整し，小規模または辺鄙なところに点在している学校を撤廃し，郷鎮の中心学校に合併する方針という。

⑻　田原（2009）pp.121-131

⑼　「出稼ぎ経済」を中国語で言えば「打工経済」である。人類学者の周大鳴が定義した言葉で，（周2006）それによれば，出稼ぎ経済とは，農業を主とする農村で，外地への出稼ぎの割合が労働力全体の30％ほどを占め，出稼ぎが現金収入の主たる源泉となっているような状態を指す。

⑽　トクヴィル（1998）p.338

⑾　ここでの伝統行事は主に文化革命時代に退廃し，改革開放後徐々に復帰した行事を指す。

⑿　旧暦の7月15日は日本のお盆に当たる祭りである。この日に自分の先祖が帰ってくるのを待っている。そのため，先祖があの世で使っている'お金'を燃やして送る。また，この期間は一族団欒の時期でもある。

⒀　文化大革命時代に北京の紅衛兵は「旧思想，旧文化，旧風俗，旧習慣」を打破する運動を行った。

⒁　中国における父系血縁集団である宗族が，系図を中心に宗族の男性の字，生辰，卒年，業績，家訓などを記載した文書である。女系の先祖・子孫は掲載されない。文化大革命のさなかには，「破四旧」運動によって，多くの族譜が焼却された。

⒂　この日を端午とする風習は，紀元前3世紀の中国，楚で始まったとされる。楚の国王の側近であった屈原は人望を集めた政治家であったが，失脚し失意のうちに汨羅江に身を投げることとなった。それを知った楚の国民たちは，粽を川に投げ込み，魚たちが屈原の遺体を食べるのを制したのが始まりと言われている。端午当日は，野に出て薬草を摘み，色鮮やかな絹糸を肩に巻いて病を避け，邪気を払う作用があると考えられた蓬で人形を作って飾り，また，菖蒲を門に掛けて邪気を追い払うと同時に，竜船の競争などが行われていた。

⒃　二つの村がペーロン競争のことで，村と村の間にトラブルが起きて，挙げ句の果て，大規模な闘争に走り，結局負傷者が合わせて34人も出る（うち8人が大怪我）大惨事になった。ついに，武装警察が80人も出動し，二つの村を囲み，闘争参加者全員を逮捕した事件。（聞き取り調査による）

⒄　旧正月の一日から，各自然村は決まっている順番にしたがってお寺から仏像を自分の村に担いで運び，仏像を村の誰の家に置くかは事前にクジで決める。福は仏様と一緒に来ると信じるので，仏像が自分の家に来るように村民は積極的に応じている。

⒅　日本の巡り地蔵と似ている形。

⒆　獅子舞は西域から伝わってきたという説がある。文殊菩薩の乗り物で，百獣の王とも言われている。民間では，獅子は幸運をもたらしてくれると信じられているので，めでたい日に獅子舞という形で祝う習慣が徐々に形成されてきた。

⒇　不孝なことは三つあり，後継ぎがないことは最も大きな不孝である。

(21)　賀（2008）p.50

(22)　賀（2008）p.50は人間同士の付き合い中で，他人の評価を気にすることよって生じた人間行為の意義認識を社会性価値と定義している。

(23)　現在中国の政治体制について，学者の間に権威主義体制，ポストトータリタリアニズム体制，党国一体体制，国家社会主義体制，権貴社会主義体制など様々な議論が為されていて，まだ有力な定説がない。

(24)　菅谷（2007）p.13

(25)　Blau（1964）

(26)　稲葉（2015）p.58

(27)　許（2012）p.285

(28)　ここで言うジャングル世界とは暴力で征服するよりも，村民同士の間で何においても権力と金銭

次第ですべてが決まるという信仰を指す。

(29) 阿古（2016）p.46